判断のモダリティ表現について

―「と見える」を中心に―

チョン・ミリョン*

1．はじめに

日本語の判断を表すモダリティ表現には「ようだ」「そうだ」「らしい」「だろう」「かもしれない」「にちがいない」などがある。さらに、先行研究では「と見える」「と見られる」「とおもう」などもモダリティ表現の一種であるとしている。

本報告では、次の⑴～⑶に見るような「と見える」を取り上げ、そのモダリティ表現としての意味について考察する。

⑴ 「あの犬は午さがりには元気にいた。すると殺されてほどもないと見える。」
（国盗り物語）

⑵ 二年目の夏に彼は国から催促を受けて漸く帰りました。帰っても専門の事は何にも云わなかったものと見えます。（こころ）

⑶ さっきより風がだいぶ強くなったと見える。それはあちこちの森から絶えず音を引きもいでいた。（風立ちぬ）

⑴～⑶の「と見える」は「ようだ」や「らしい」に置き換えが可能と考えられる。これら「と見える」「ようだ」「らしい」が韓国語でまったく同じように解釈されるが、「と見える」を引用の形式を入れた形で解釈すると不自然になるからである。なお、「と見える」が口語ではあまり使われなく、文語体であるという指摘もあり、本報告では、どうして「と見える」が「ようだ」や「らしい」の意味に取れるのか、あるいはこれらの形式にはどういった相違点があるのかについて明らかにすることを目的とする。

2．先行研究

山岡（2003）では、「見える」などの動詞が「「と見える」「と言える」の形では、認知様態を表すモダリティ付加辞「だろう、そうだ、ようだ、らしい」などに相当する程度に、実質的意味をほとんど失う。」とし、次の例をあげて、説明を加えている。

⑾ 彼女は騒ぎを聞いて慌てて駆けつけたと見える。 山岡（2003）

「「と見える」の形で補文を取るようになると、述語のモーダル化は一層進み「見る」の実質的意味はほとんど残らず、ダロウ、ヨウダ、カモシレナイ、ニチガイナイなど、認知様態を表すモダリティ付加辞に近い働きをする。(25ｐ)」

このように山岡（2003）では、「と見える」をモダリティを表す形式（付加辞）に相当すると述べているが、詳しい意味・機能などについては説明していない。山岡（2003）の他に、砂川（1987）、仁田（1991）、日本語記述文法研究会編（2003）のような先行研究でも、「と見える」構文をモダ

＊同徳女子大学博士課程

リティ形式として挙げているのにとどまり、「と見える」を判断のモダリティとして詳細に分析した研究は見当たらない。

3．「と見える」構文の意味

⑷のような「と見える」を述語とする構文は、伝達内容（命題内容）が話し手の視覚によって得られた情報を根拠に判断したものであることを表す。

⑷　アッという間にペロッと平らげたアヤキ、やっと人心地がついたらしくニッとわらった。どうやら朝食ヌキで稽古に励んでいたと見える。　（毎日新聞2000/5/3）

つまり、⑷は、話し手が視覚によって得られた情報、〈「アヤキ」の行動（アッという間にペロッと平らげたこと）〉を根拠にして、〈どうやら朝食ヌキで稽古に励んでいた〉と判断していることを表す。⑸にも同様なことが言えるであろう。

⑸　殴られた男を左右から扶け起し、捨台詞一つ残さずにこそこそと立去った。何時かこの事が孔子の耳に入ったものと見える。子路が呼ばれて師の前に出て行った時、直接には触れないながら、次のようなことを聞かされねばならなかった。　（弟子）

「と見える」は「ようだ」「らしい」などと意味的に類似しており、次の例文⑹に見るように、３形式は置き換えが可能である[1]。

⑹　どうやら朝食ヌキで稽古に励んでいた{と見える／ようだ／らしい}。

⑹の例は観察したことを根拠に判断を下したことを表している。このような文では「と見える」が使われると、主観性のもっとも強く感じられ、「と見える」が表しているのは「判断した内容を視覚化する」と考えている。話し手の判断をより主観的かつ視覚化して提示したい場合に「と見える」を使うと考えられる。

4．「と見える」と「と見られる」「模様だ」の比較

「と見える」と「と見られる」「模様だ」は、話し手の根拠に基づいた判断を表す形式という点で類似しているが、使われる文体に違いがある。「と見られる」と「模様だ」は、それぞれ報道文テキスト、公的報告の立場において、主に使われるが、「と見える」はいずれの場合にもあまり用いられない。

4.1 「と見える」と「と見られる」

志波（2013）では、「「と見られる」構文が「見られる」述語に対する主語を持たない特殊な構造のラレル文である」とし、「「話し手の証拠に基づく推論」というモダリティ表現として機能している」と指摘している。話し手の証拠に基づいた判断であることを表している点で「と見える」と類似していると考えられるが、⑺のような判断の主体に話者が含まれないか、判断の主体が曖昧な場合には「と見える」に置き換えると不自然である。

⑺　那覇署の調べでは、トラクターが深みにはまり、脱出しようとしたところ前輪が空転し、トラクターが裏返しになった｛とみられる／?とみえる｝[2]

「と見られる」構文は、志波の指摘の通り、⑺のように報道文テキスト[3]で多く用いられるが、このような文において「と見える」に置き換えられない。「と見える」構文は、常に判断の主体が話し手であるからである。つまり、話し手の個人的判断が許されない、事実を客観的に伝える報道

文テキストにおいて、話し手の判断であることを表す「と見える」は適切ではなく、「と見られる」が使われるのである。

実際、2000年01月～2000年12月の毎日新聞の報道文を対象に調べた結果、「と見える」が用いられた例は見当たらず、コラムに４例しかなかった。やはり、報道文テキストでは判断の「と見える」は使われにくいと考えられる。一方、新潮100冊やKOTONOHA少納言などの文学資料のデータベースを調べると、「と見える」構文の用例が地の文・会話文で多数見られる。もっぱら話者の判断を表すという特性から、「と見える」構文は、報道文テキストのような個人の判断を介しない文には使われないと考えられる。

4.2 「と見える」と「模様だ」

「と見える」と「模様だ」は、観察したことを根拠にして未知のことを伝達するということは類似しているが、判断の主体においては違う。「と見える」は話し手の判断を表しているが、佐藤(2004) で指摘しているように、「模様だ」は「公的報告」という話し手の個人の判断を表さないという点である。

佐藤（2004）で「模様」の報告用法について下記のように述べている。

> 「犯人はすでに逃走した模様だ」のように、文末に位置して話者が何らかの報告を述べるものが見受けられる。…このような文を「「模様」の報告用法」と呼ぶ。この「模様」の報告用法は発話状況の観点からは〈公的報告の立場〉、発話態度の観点からは〈状況の見た目の描写〉という特徴を有する。さらにこの〈状況の見た目の描写〉という特徴の帰結として、〈認識の非表明〉と〈真偽の不確実〉という特徴を有することになる。また、文末が無標の確言の文やヨウダ等の概言形の文がいずれも機能しない状況において、このタイプの文が体系の隙間を埋める形で働いていると考えられる。(p.73)

佐藤（2004）は「模様だ」と「ようだ」が置き換え可能な場合とそうでない場合があると指摘し、「模様だ」が使われるのは「公的報告」の場面であると説明している。つまり、「と見える」「模様だ」「ようだ」の間では話し手の立場によって使い分けが決まるのであると考えられる。 次の⑻、⑼において、「模様だ」を用いると、〈公的報告の立場〉に立って伝達内容を述べることになる。この公的報告の立場という意味では、「と見える」に置き換えることはできない。「模様だ」の代わりに「と見える」を用いると、「と見える」が常に話者の判断を表しているため、伝達内容が話者個人の意見であることを表すことになる。

⑻　犯人はすでに逃走した{模様だ／と見える}。
⑼　政府は近々新たな金融緩和策を発表する{模様だ／と見える}。

5.「かと見える」と「ものと見える」

「と見える」の前に「か」や「もの」が前接した形式も見られるが、「と見える」とは意味に若干違いが見られる。

⑽　トンボの群れは、背のうをしょって行進する兵隊たちの目玉までつきさすかと見えるのに、ザックザックの行進のリズムは、かたときも乱れそうになかった。　（龍の黙示録）
⑾　見れば二十五、六かと見える実直そうな男が立っている。商人体の若者だ。
（八州廻り御用録）

⑽、⑾は、「かと見える」を述語とした例であるが、その意味は、実際はそうであるかどうか分からないが、ただ眼前の様子をそうであると描写

していることを表した文であり、判断までには至らないと考えられる。 実際はそうであるかどうか分からないということは「カ」の意味からくる不確実さと思われる。

一方、「ようだ」にも「か」が前接した形式の「かのようだ」があるが、「かのようだ」は「かと見える」とは意味が違うと思われる。

⑿　この部屋には生々しいワーグナーの亡霊が飛翔しているかのようだ。

（ワーグナー紀行）

「かのようだ」は「実際はそうでないのに、そうであるかのように振舞ったり、感じたりする様子を表す。事実と矛盾したり、仮想的なことがらをたとえに挙げて言う場合が多い[4]」とされる。「実際はそうでない」ということを認識しているか否かという点において、「かと見える」と「かのようだ」は意味的に違いがあると考えられる。

次の⒀は、「ものと見える」が用いられている例である。

⒀　古い碑は、「南無阿弥陀仏」とあって、碑の片側に「文化九壬申年七月建立之」とあるのが読めた。多くの津軽藩兵の病死から数年して、この慰霊碑がたてられたものとみえる。あたらしいほうの碑は、昭和四十八年（一九七三）に建てられた。

（オホーツク街道）

「ものと見える」においては、「もの」が付くことにより、その判断が話者だけの判断ではなく、より一般的な判断であるということを表すようになると考えられる。実際、ネイティブ話者に確認したところ、「ものと見える」より「ものと見られる」に置き換えたほうがより自然という指摘があった。⒀の文において、報道文テキストで使われる「と見られる」が用いられたほうが自然であるということは、文脈上、一般的な判断を表す－特定の人物による判断ではなく、一般的にそのように判断されているという意味－ことが求められているということを意味すると考えられる。このような文脈を持つ⒀に「ものと見える」が使われているということから、「ものと見える」が「と見える」に比べて、より客観的な判断を表す表現であると考えることができるだろう。

6．おわりに

本報告では、モダリティ表現としての「と見える」構文の意味について考察し、「と見える」構文が、伝達内容（命題内容）が話し手の視覚によって得られた情報を根拠に判断したことであることを表す、あるいは「判断した内容を視覚化して提示する」モダリティ表現であること、そして判断の主体が常に話し手であるため、主観性が強いという特徴を持つことを述べた。

また、話し手の視覚情報に基づく判断を表すと考えられる「と見られる」と「模様だ」との比較を通じてその違いを明らかにした。さらに、「かと見える」、「ものと見える」についても考察し、その特徴を指摘した。

「と見える」は、文体的な特徴として、報道文テキストには用例が少なく、新聞のコラムや小説の地の文・会話文 、紀行文などには用例が多数見られる。このような文体的な特徴は「と見える」構文が話し手の判断を表す主観性の強いモダリティ表現であることに起因していると考えられる。

今後、今回の分析結果を踏まえ、「と見える」のモダリティ表現としての成立過程に関して史的な観点から考察を加えたい。

参考文献

菊地康人（2000）「「ようだ」と「らしい」―「そうだ」「だろう」との比較も含めて―」『国語学』第51巻1号，pp46－60，日本語学会

グループ・ジャマシイ（1998）『日本語文型辞典』p.617 くろしお出版
佐藤琢三（2004）「「模様」の報告用法について」『国語学』第55巻４号，pp.73－84，日本語学会
志波彩子（2013）「「ト見ラレル」の推定性をめぐって－ラシイ、ヨウダ、（シ）ソウダ、ダロウとの比較も含め－『日本語文法』13巻２号，pp.122－138，日本語文法学会／くろしお出版
砂川有里子（1987）「引用文の構造と機能－引用文の３つの類型について－」『文藝言語研究　言語篇』13，pp.73－91，筑波大学文芸・言語学系
寺村秀夫（1984）『日本語のシンタクストと意味Ⅱ』くろしお出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』（増補版）ひつじ書房
日本語記述研究会（2003）『現代日本語文法４　第８部モダリティ』くろしお出版
三宅知宏（1994）「認識的モダリティにおける実証的判断について」『国語国文』第63巻第10号，京都大学文学部国語国文学研究室
山岡政紀（2003）「可能動詞の語彙と文法的特徴」日本語日本文学13号，創価大学日本語日本文学会

〈用例出典〉

『CD－毎日新聞2000データ集（毎日新聞社）』
『KOTONOHA現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言』（オホーツク街道）（水中花）（八州廻り御用録）（龍の黙示録）（ワーグナー紀行）
『CD－ROM版新潮文庫100冊』（風立ちぬ）（国盗り物語）（こころ）（弟子）

注

1　「ようだ」と「らしい」の類似性に関しては、寺村（1984）、三宅（1994）、菊地（2000）を参照されたい。
2　朝日2006/5/7、志波（2013）の（15）の例、「?と見える」は発表者による。
3　志波（2013）は、「報道文テキストとは、書き手の意見や評価よりも、実際に起きた（起きる）出来事を事実として伝えることに主眼を置き、普通体で書かれることを特徴とする。」と定義しいている。（p.124）
4　グループ・ジャマシイ（1998）p.617